**現代日本社会の争点: 若者文化への理解**

2022学年度 2学期、木曜日、**午前10時～午後12時50分**

140－1 ＃202

* 講師: 朴志煥(パク・ジホワン、副教授、文化人類学専攻)
* メール: jeehwan95@snu.ac.kr
* 電話番号: 02-880-9218
* オフィスアワー: 個別に対応、メールで事前に約束が必要、オンラインでも可能
* Zoom Address and ID: https://snu-ac-kr.zoom.us/j/5560157652 or 556 015 7652
* **セミナの概要と目的(class description and objectives)**

このクラスは現代日本社会において、若者たちを取り巻く社会環境の変化を考えながら、若者たちの生き方、思考、感情などを彼らの観点から理解することを目的にする。まず、バウマンの『液体現代』を参考にしながら、現代性(modernity)の特徴や変化について考えてみる。その後、この特徴と変化が日本の若者たちにどのような影響を与えたか、またはそれを彼らたちはどのように受け止めたり、それにどのように対応したりしたかなどを探してみる。具体的には若者論、若者の戦後史、オタク文化、学校から社会への移行、夢追い型の若者、海外に移住する若者、地方に住む・残る・戻る・移住する若者、現在志向の若者、自己開発と若者などについて議論して行く。

* **読み物(reading materials)**

このクラスで扱うすべての論文やbook chaptersはETL(https://etl.snu.ac.kr/)にアップロードされる予定である。

* **セミナの進め方と方法(class format)**

このクラスは討論を中心として進めたい。講師による講義や院生のプレゼンテーションに時間を費やすより議論に集中したいと思っている。そのため、クラスのメンバー一人一人の役割が大切になる。我々はみんな講師であり、発表者や討論者でもある。まず、毎週にあてられているすべての論文は必ず読んでクラスに参加する。また、自分が論文を読む際に感じた疑問や質問をクラスのメンバーと共有する。さらに、積極的にセミナに参加しながらもお互いの意見を尊重しなけばならない。このようなプロセスを通して、テキストに対する多様な理解・解釈に到達することを試みる。

* **課題(assignment)**

課題は論文の内容に関する質問をETLに毎週水曜日の午後6時まで提出することである。事実を確認する質問もよいが、もっと望ましいことを著者の主張や解釈について自分の意見を含めて質問することである。つまり、クラスで議論するための質問を考えてみることである。質問は日本語、あるいは英語で作成してもよい。質問の長さや数は評価に影響を及ばない。すべての論文に対して質問する必要はないが、活発な討論のためにすべての論文をきちんと読んでクラスに参加しなければならない。

* **評価(evaluation)**

課題(毎週、討論のための質問）70％(5点×14回)、セミナへの参加 30％。今学期において出席は評価しない。コロナがまだ収束されていないため(しかし、原則的にオンラインの授業はできないので)、少しでも体の調子がよくなかったら自分自身の判断で休みを取ってください。

* **セミナのスケジュール(class schedule)**

**第1週 9月1日 セミナの紹介**

**第2週 9月8日 リキッド・モダニティ―液状化する社会 ⓛ**

Bauman, Zygmunt. 2000.“Forward, Ch 1 Emancipation, and Ch 2 Individuality.” *Liquid Modernity*. Polity. Pp. 1-90.

# 第3週 9月15日 リキッド・モダニティ―液状化する社会 ②

Bauman, Zygmunt. 2000. “Ch 3 Time/Space, Ch 4 Work, and Ch 5. Community.” *Liquid Modernity*. Polity. Pp. 91-201.

**第4週 9月22日 若者文化を問う**

古市憲寿(ふるいち・のりとし). 2011.「若者の誕生と終焉」.『絶望の国の幸福な若者たち』.講談社. Pp.18-68.

片瀬一男(かたせ・かずお). 2015.「若者文化の行方」.『若者の戦後史』.ミネルヴァ書房. Pp.269-293.

小谷敏(こたに・さとし). 2017.「若者文化の絶望と希望」.『二十一世紀の若者論―あいまいな不安を生きる』. 世界思想社.Pp. 187-204.

**第5週 9月29日 若者の戦後史ⓛ: 1950s-1979s**

片瀬一男(かたせ・かずお). 2015.「集団就職者の高度経済成長」,「モラトリアム人間の就職事情」.『若者の戦後史』. ミネルヴァ書房. Pp.89-133,135-173.

**第6週 10月6日 若者の戦後史②: 1980s-2000s**

片瀬一男(かたせ・かずお). 2015.「新人類の情報格差」,「もう一つのロスジェネ」.『若者の戦後史』. ミネルヴァ書房. Pp.177-229, 231-267.

**第7週 10月13日 学校から社会へⓛ: 個人化・アイデンティティ・コミュニティ**

乾彰夫(あきお・いぬい). 2010.「第III部 日本の若者たちの移行過程の変容」.『学校から仕事への変容と若者たち』. 青木書店. Pp.127－270.

**第8週 10月20日 学校から社会へ②: ジィンダー**

杉田真衣(すぎた・まい). 2013.「若年女性と性的サービス労働」.『高卒5年どう生き、これからどう生きるのか:若者たちが今大人になるとは』.大月書店. Pp.107－143.

杉田真衣(すぎた・まい). 2018.「東京に生きる若年女性のキャリア: 空間的移動に着目して」.『教育社会学研究』102: 125-144.

宮島基(みやじま・もとい). 2013.「家族を支える女性たち:若者の移行とケアワーク」.『高卒5年どう生き、これからどう生きるのか:若者たちが今大人になるとは』.大月書店. Pp.145-180.

渡辺大輔(わたなべ・たいすけ). 2013.「男性のジェンダー／セクシュアリティ意識と進路選択・将来展望」.『高卒5年どう生き、これからどう生きるのか:若者たちが今大人になるとは』大月書店. Pp. 181-212.

**第9週 10月27日 オタクの系譜学**

難波功士(なんば・こうし). 2007.「おたく族からオタクへ」.『族の系譜学: ユース・サブカルチャーズの戦後史』. 青弓社. Pp.247-269.

辻泉(つじ・いづみ). 2017.「オタクたちの変貌」.『二十一世紀の若者論―あいまいな不安を生きる』. 世界思想社. Pp.146-167．

七邊信重(ひちべ・のぶしげ). 2005.「純粋な関係性と自閉: 同人界におけるオタクの活動の分析から—」.『ソシオロゴス』(29): 232-49.

大倉韻(おおくら・ひびき). 2021.「オタクぶんかは、現在でも都市のものなのか」.『場所から問う若者文化』.晃洋書房. Pp.24-44.

Recommended

Azuma, Hiroki[東浩紀]. 2009[2001]. *Otaku: Japan’s database animals* [動物化するポストモダン: オタクから見た日本社会]. Minneapolis: University of Minnesota Press.

**第10週 11月3日 サブカルチャーと夢を追う若者たち**

新谷周平(あらや・しゅうへい). 2002.「ストリートダンスからフリーターヘ: 進路選択のプロセスと下位文化の影響カ」.『教育社会学研究』71:151-170.

荒井悠介(あらい・ゆうすけ). 2021.「Gathering文化からSharing文化へ: 渋谷センター街のギャル・ギャル男鳥居部の変異」.『場所から問う若者文化』. 晃洋書房. Pp.45-69

荒井悠介. 2022.「若者サブカルチャーで獲得した資本の関連産業界における活用と限界」.『明星大学社会学研究紀要』42:1-20.

野村駿(のむら・はやお). 2018.「なぜ若者は夢を追い続けるのか: バンドマンの将来の夢をめぐる解釈実践とその論理」.『教育社会学研究』103:25-45.

**第11週 11月10日 海外に出る若者たち**

大野哲也(おの・てつや). 2007.「商品化される冒険: アジアにおける日本人バックパッカーの自分探しの旅という経験」.『社会学評論』58(3): 268-285.

大野哲也. 2011.「アイデンティティの再肯定: アジアを旅する日本人バックパッカーの自分探しの帰結」.『社会学部紀要』111: 155-170.

藤岡伸明(ふじおか・のぶゆき). 2012.「若者はなぜ海外長期滞在を実践するのか: オーストラリア・ワーキングホリデー制度利用者のライフヒストリー分析」.『労働社会学研究』13: 36-68.

松谷実のり(まつたに・みのり). 2015.「若者はなぜ現地採用者になるのか: 上海への移住労働者を作り出すメカニズムの視点から」.『ソシオロジ』60(2): 95-113.

**第12週 11月17日 地方に生きる若者たち**

尾川満宏(おがわ・みつひろ). 2011.「地方の若者による労働世界の再構築: ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関」.『教育社会学研究』88:251-271.

山口恵子(やまぐち・けいこ). 2014.「東京に出ざるえない若者たち: 地方の若者にとっての地元という空間」.『現代思想』 42(6): 224-236.

轡田竜蔵(くつわだ・りゅうぞう). 2011.「過剰包摂される地元志向の若者たち」. 樋口明彦・上村泰裕・平塚眞樹 編.『若者問題と教育・雇用・社会保障』. 法政大学出版局. Pp.183-212.

打越正行(うちこし・まさゆき). 2019.「ライフコースからの排除: 沖縄のヤンキー、建設業の男性と暴力」.『現代思想』47(4): 89-97.

Recommended

尾川満宏. 2012. 「地元労働市場における若者たちの大人への移行: 社会化過程としての離転職経験」. 『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部. 教育人間科学関連領域』 61: 57-66.

尾川満宏. 2018.「若者の移行経験にみるローカリティ: 仕事、家族、地元のリアリティをめぐる社会=空間的アプローチの可能性」.『教育社会学研究』102:57-77.

**第13週 11月24日 地方へ移住する若者たち**

牧野智和(まきの・ともかず). 2021.「若者の地方移住をめぐる語り」.『場所から問う若者文化』. 晃洋書房. Pp.98-113.

永田夏来(ながた・なつき). 2021.「フジロックフェスティバルに帰る人々」.『場所から問う若者文化』. 晃洋書房 . Pp. 119-135.

有馬元輝(ありま・もとき)・米田誠司(よねだ・せいじ). 2018.「地方移住の理想と現実」.『地域創成研究年報』13:65-87.

石川和男(いしかわ・かずお). 2020.「地域おこし協力隊は地方創生につながるのか」.『専修商学論集』110:1-17.

Recommended

井戸聡. 2020.「地方移動の若者の一動向: 地域おこし協力隊の実践としての生き残り戦略」.『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』6: 118-106.

**第14週 12月1日 現在志向の若者たち、社会に貢献したい若者たち**

古市憲寿(ふるいち・のりとし). 2011.「東日本大震災と想定内の若者たち」.「絶望の国の幸福な若者たち」.『絶望の国の幸福な若者たち』.光文社. Pp.192-269.

富永京子(とみなが・きょうこ). 2020.「若者文化における政治への関心と冷笑：雑誌『ビックリハウス』を事例として」. 『年報社会学論集』33: 85-96.

羽田野慶子(はたの・けいこ). 2014.「若者と地域活動: 福井市における大学生のまちづくり活動の事例から―」.『社会科学研究』65(1):97-116.

橋口昌治(はしぐち・しょうじ). 2014.「揺らぐ企業社会におけるあきらめと抵抗: 若者の労働運動の事例研究」.『社会学評論』65(2):164-178.

**第15週 12月8日 自己啓発**

牧野智和(まきの・ともかず). 2010a.「自己の文化社会学に向けて」.『学術研究 教育学・生涯教育学・初等教育学編 』58: 37-59.

牧野智和. 2009.「ビジネス誌が啓発する力に関する一考察: 社会的実践としての力をめぐる表現の分析」.『教育社会学研究』84:145-163.

牧野智和. 2010b.「就職用自己分析マニュアルが求める自己とその機能: 自己のテクノロジー という観点から」.『社会学評論』61(2):150-167.

牧野智和. 2012.「女性のライフスタイル言説と自己: ライフスタイル誌『an・an』の分析」『自己啓発の時代:自己の文化社会的探究』勁草書房 Pp.135-187.